

「つながるいのち」の輝きのために  
～校長講話を通じた児童の道徳性の育成～

松原好広

【要旨】

1 道徳性の育成について

道徳の教科化に伴い、「考え、議論する」道徳科の授業が打ち出され、児童生徒は、これまで以上に多面的・多角的に、「考え、議論する」ことが期待されるようになった。

その一方で、このような学習活動が定着し、個々の内容項目について、「考え、議論する」学習活動を続けることができたとしても、果たして、児童生徒の道徳性の育成ができるのだろうか。

道徳性について先人はどのように考えていたのであろうか。アリストテレス<sup>(1)</sup>は、『ニコマコス倫理学』で、道徳性を「善」と捉え、あらゆる人間活動は何らかの「善」を追求していくことであると強調している。コールバーグ<sup>(2)</sup>は、ジャスト・コミュニティを、児童生徒が、公正な社会においてルールが作り出されるプロセスを教師と共に学ぶ場であるとしている。そして、人間の生きる基本原理を相互扶助の原理と把握した廣池千九郎<sup>(3)</sup>は、人間は、他とのつながりの中で生きる存在であり、すべての物に対して、慈愛の心と感謝の念をもつことが大切であるとしている。

2 「三方よし」について

『道徳科学の論文』の著者、廣池千九郎は、その「第二版自序文」その他において、「すべての存在は、互いにつながり合い、支え合う関係にある」ことを強調している。中田中<sup>(4)</sup>によれば、廣池が実践した「三方よし」の考え方は、この「大きないのちの輪」（相互扶助の原理）の関係をわかりやすく示すものということができ、その実践とは、自分、相手、第三者、社会、自然など、すべての存在の「よし」を目指すというものと考えられるであろう。

平成29年に告示された小学校学習指導要領では、道徳教育の内容として4つの視点に分類された19-22の内容項目を挙げている。これらの内容を全体としてつきつめて考えれば、「すべてのいのちは、つながり合い、支え合う関係にある」という考えに立っているといえるだろう。したがって、道徳教育において、新しい枠組みの一つとして、廣池の提唱する「三方よし」の実践を活用することが効果的ではないかと考える。

岩佐信道<sup>(5)</sup>は、「学校の道徳教育においても、三方よしという枠組みは、極めて大きな意義をもたはずである。なぜなら、この枠組みは、内容や状況の違いをこえて、

道徳問題を考えるための普遍的な枠組みということができ、道徳の授業でもこの観点を活用して議論を深めることが期待される。」と指摘している。

「三方よし」の実践とは、ただ「自分よし」、「自分と相手よし」だけでなく、常に、その向こうに存在する第三者、すなわちすべての存在の「よし」を願って考え、行動することといえるのである。しかし、このような「三方よし」は、児童たちにとって理解することも、実践することも決して容易なことではない。

したがって、「三方よし」の実践を、「まず自分が相手、他者と出会う」段階、次に「その相手、他者とのつながりを深めていく」段階、そして「その先に存在するすべての第三者の『よし』を目指す」段階ととらえることができるのではないかと考える。そこで、「三方よし」の考え方を児童たちに対して展開していくに当たっては、最初は「相手、他者と出会う」段階、次に、「その相手、他者とのつながりを深めていく」段階、そして最後に、「その先にいるすべての第三者の『よし』を目指す、実現しようとする」段階ととらえることがふさわしいと考えたのである。

### 3 校長講話と「つながるいのち」の輝き

公立小学校の校長講話は、全校朝会、学校行事、避難訓練等を含めると年間 35 回以上にのぼる。これは、道徳科の授業回数と同じかそれ以上の回数である。

また、校長講話は、ある特定の学級で行うものではなく、全学級の児童、全教師の前で行うものである。児童や教師にとって、校長講話は、校長の考えや思いに直接触れ、普段、考えることのない貴重な話を聞く機会となる。朝会后、担任は、校長講話の補足説明をしたり、噛み砕いて自分の思いを説明したりすることもあるだろう。

このように、校長講話の在り方を研究することは、大いに価値あることではないだろうか。なぜならば、校長の多くは、その時々思い付きで、校長講話を行ってきたと考えるからである。

では、校長は、どのような理論的展望をもって、校長講話に臨めばよいのだろうか。行安茂<sup>6)</sup>は、「校長は、個々の道徳的諸価値を児童生徒に理解させるだけでなく、目指すべき児童像を示し、その実現に向けて、教師を導き、どのように道徳性を育ていけばよいのかを具体的に指導する。」と指摘している。

言い換えれば、小中学校の 19～22 の内容項目を年間 35 時間の道徳科の授業で理解させたとしても、その先にある児童像は見えてこないということである。校長は、まずは目指す児童像を教師や児童生徒に示し、校長講話をその実現のための枠組みへと変えていく必要があるのである。

そこで、本研究では、児童が、「自分よし」「相手よし」を踏まえながら、「第三者よし」を目指して、「三方よし」が実現されるようにしようとした。また、児童には、少しでも身近なものとして考えられるようにするため、「つながるいのち」の輝きという言葉で表現することにした。そこで、この「つながるいのち」の輝きに基づく校長講

## 修士論文要旨

話の出発点は、まず、そうした他者と出会い、その存在に気づくことといえる。次に、そうした他者とつながり、その関わりを深めていくことである。そして、最後に、その向こうにいるすべての他者に会い、つながる、ということになるのである。

以上のことから、校長講話も、「あなたと出会う」「あなたとつながる」「その向こうにいるあなたと出会い、そしてつながる」のテーマで行うようにした。

### (1) 「相手、他者と出会う」講話

この段階の講話は、他者と出会い、その存在に気づく講話であり、具体的には、挨拶、礼儀などの講話である。

### (2) 「その相手、他者とつながりを深めていく」講話

この段階の講話は、他者とつながり、その関わりを深めていく講話であり、他者に対する思いやり、勇気、感謝などの講話である。

### (3) 「その先にいるすべての第三者の『よし』を目指し、実現しようとする」講話

この段階の講話は、その向こうにいるすべての他者に会い、つながるための講話であり、第三者、いじめなどの講話である。

## 4 校長講話の概要と調査の概要

校長講話は、年間を通して行っているが、修士論文作成の関係で、平成 30 年 4 月 6 日（金）の始業式から令和元年 10 月 11 日（金）の前期終業式までの合計 82 回中、半数以上の 49 回で、「つながるいのち」の輝き（出会い 14 回、つながる 13 回、その向こう 22 回）に関する校長講話を行った。

たとえば、第三者に関する「三方よし」という話は学校の花壇を導入とした。まず、校内の花壇のうち、通り沿いの花壇に注意を向けさせ、「皆さんや先生たちが、花を眺めるだけなら、わざわざ外の通り沿いに植える必要はありません。なぜ、植えたのでしょうか。」と問いかけた。そして、「学校の児童、先生に限らず、外を歩いている人にも見ってもらって、ホッとしてもらうために通り沿いに花を植えました。」とその意味を理解させた。そして、「このように、児童がよく、先生がよく、さらには、一般の人にもよいことを、(紙を広げて)『三方よし』といいます。この『三方よし』は、花だけではありません。普段の生活にも当てはまります。たとえば、友達を例に挙げてみますと、自分だけがよくてもいけません。仲のいい友達だけでもいけません。自分と仲のいい友達以外の友達にも、よくなければならないのです。『三方よし』の心とは、自分や友達、それ以外のすべてのものを大切にしようとする心です。どうかそのことを考えて生活してください。」と締めくくるものであった。

さらに、校長講話が、児童にどのように受け止められたかを調べるため、初年度の終わり近く（平成 31 年 2 月）に中間調査を、2 年目 1 学期の終わり（令和元年 10 月）に最終調査を行った。調査は、次の(1) (2) (3) (4)の 4 種類である。そのうち、(1)から

## 修士論文要旨

(3) までは中間調査と最終調査の両方で、(4) は最終調査だけで行った。

(1) 校長講話に関する受け止め方の児童による5段階評価。次のような5つの文章について児童の受け止め方を、「1 全くそう思わない」から「5 とてもそう思う」までの5段階評価で尋ねるもの。

- ① 自分のためになった。
- ② 知らないことを知ることができた。
- ③ 挨拶について考えることができるようになった。
- ④ いじめについて考えることができるようになった。
- ⑤ つながるいのちについて考えることができるようになった。

(2) 校長講話に関する児童の自由記述に対して、次のような5段階尺度で評価するもの。

- ① ほとんど興味や関心がなかったことを示す記述
- ② 一部、関心があったことを示す記述
- ③ 全体として、校長講話を楽しんで聞いていたことを示す記述
- ④ 心が動かされ、理解が深まり、自分の生き方の参考になったことを示す記述
- ⑤ すべての人のためになること（「三方よし」）を実行しようと、行動を起こしていることを示す記述

(3) 学級担任の児童へのかかわりに関する次の3項目の質問による調査。

- ① 校長の話を受けて、どのぐらいの割合で児童に話をされましたか。
- ② 校長講話を受けて、児童に何か働きかけを行いましたか。
- ③ 校長講話を聞いた児童に何か変化は見られましたか。

(4) 児童の心に残った校長講話の調査。最終調査において、これまでの校長講話の中でどれが一番心に残ったかを尋ねるもの。（複数回答可）

以上は、本研究で行われた調査の骨子であるが、ここで触れておかなければならないのは、(2) 校長講話に関する児童の自由記述の評定で用いられた5段階尺度である。これは校長講話について児童に思うことを自由に書いてもらった文章を、校長講話のねらいという観点から、それに最も遠い文章①から、最も近い文章⑤、へと至る尺度上に位置づける目的で構成したものである。

たとえば、①に該当する自由記述には、「話が長くてつかれる。」「話がむずかしくて、よく分からなかった。」などが、また⑤に該当するものには、「自分は、『三方よし』ができていかなと思っていましたが、教室に戻ると、『本当にできていかな?』と思い、振り返ってみると、全然できていませんでした。『三方よし』とは、人が嫌な思いを一切しないという意味だと思いました。校長先生の話は、みんなが、快適に過ごすために何ができるのかという話だったと思います。」のようなものがある。この尺度による評定については、かなり高い信頼性が得られている。

## 5 成果

(1) 調査(1)の「校長講話に関する児童の自由記述の5段階評価」では、中間調査の時に比べて、最終調査では、どの項目においても、数値が等しいか、それを上回っている。特に、6学年の「①自分のためになった。」と「⑤つながるいのちについて考えることができるようになった。」は、ともに 0.7 の上昇が見られた。とくに、筆者の願いである「⑤つながるいのちについて考えることができるようになった。」の項目は、中間調査と同様に、全体的には一番低いポイントではあるが、他の項目に比べて、一番高い上昇率となっていた。これは、たとえば、先ほどの⑤の記述のように、「つながるいのち」というようなこれまでほとんど考えていなかった内容について、児童一人ひとりが考え始めた結果であり、意図的、計画的にこれらの項目の講話を積み重ねたことの成果であると考えられる。

(2) 調査(2)の「校長講話に関する児童の自由記述に対して」では、中間調査の時に比べて、最終調査では、筆者の教育的意図をしっかりと受け止めた文章、つまり、⑤の「すべての人のためになること（「三方よし」）を実行しようと、行動を起こしていることを示す記述」が、全体の23%に達した。

また、統制群のD校との自由記述の比較をすると、D校の自由記述は、「いつもパソコンを用いた話で、おもしろいし、分かりやすい。これからも続けてほしい。」などの③に評定される記述が多く見られるなど、児童は校長講話を毎回楽しみにしているにもかかわらず、全体として、「道徳性の育成」というトータルの意味としては、そこまでには至らない状況が明らかになった。

このことから、それぞれの校長講話に込めた思いの違い（筆者の場合「つながるいのち」の輝き）が、自由記述の評定の違いに表れたのではないかと考える。

(3) 調査(3)の「学級担任の児童へのかかわりに関する3項目の質問」では、中間調査の時に比べて、最終調査では、4年生から6年生の担任のすべてが校長講話を支援してくれるようになった。調査(1)、調査(2)の結果の向上が見られたのは、中間調査以降、事前に校長講話の内容やコメントのプリントを配布したり、視聴覚教材を活用したり、パフォーマンスを取り入れたりすることで、教師の意識に変化をもたらすことができたことが要因かと考える。

(4) 調査(4)の「児童の心に残った校長講話の調査」では、調査の時点で児童の記憶に新しいものが多い傾向が見られたが、筆者が着任した初年度の最初に行った校長講話も、児童の心に鮮明に残っていた。講話の内容も、「マジック」「校長との出会い」「くまモン」「ドラえもん」「いじめ」「夏休みの思い出」「あいさつ」など多岐に渡っているが、具体的でわかりやすく、驚きや感動のあるものが選ばれたということであろう。たとえば、第1位の「マジック」は、筆者が一人の児童にマジックを見せてほしいと頼まれたことがきっかけで、校長講話で実演したものであるが、マジックの後、「校長先生は、その子が喜ぶだけでなく、学校みんなが喜ぶよう

## 修士論文要旨

に、と考えてマジックをしました」と筆者の思いを話したのである。調査(2)で第5段階に評定された自由記述には「校長先生のマジックを見て感動しました。でも、校長先生が、最後に言っていた、『みんなでマジックを見る』という意味が少しわかったような気がします。私も、少しでもみんなが楽しめるようにしようと思いました。」というようなものがあり、マジックに込めた校長の思いがしっかり受け止められたと考える。

### 6 研究のまとめ

本研究では、全校朝会における校長講話に焦点を当て、「三方よし」という枠組みを通して、児童の道德性の育成（「自分」「相手」「第三者」のそれぞれが同じように大切にされる）に向けた実践を積み重ねてきた。そして、その結果、「つながるいのち」の輝きのための校長講話で、児童のかなりの自由記述（23%）が、校長講話のねらいに最も近い第5番目の尺度と評定できるようになり、児童の「道德性の育成」の一助となることのできたのではないかと考える。

年間35時間の道德科の授業で、児童の道德性を育成することは大切である。しかし、児童の道德性を育成することは、道德科の授業だけとは限らない。校長講話も、道德科の授業と同じかそれ以上に大きな意味をもつのである。校長は、その時々思い付きで校長講話を行うのではなく、児童の道德性の育成のために、「三方よし」という枠組みを通した校長講話を行うことが効果的であることを示すことができたと考える。

道德教育の充実に向けて、校長は道德科の授業のスキルやマニュアル化を図ることよりも、教師一人一人が、「道德性の育成」という意味を探究し、理解を深めることが重要であると考え。言い換えれば、「三方よし」を抛りどころとした校長講話を通して、児童生徒及び教師が、「三方よし」についての理解を深め、全教育活動を通して、道德教育を積み重ねていくことが、児童の「道德性の育成」の一助となるということのできるのではないか。このことこそ本研究が広く世に訴えたいことなのである。

### 7 今後の課題

本研究が、児童の「つながるいのち」の輝きのための校長講話を、廣池千九郎の人生の指針である「三方よし」について、児童の発達段階を考え、「第三者よし」だけではなく、「自分よし」「相手よし」についても同時並行で校長講話の実践を行ってきた。本研究の実践を振り返ってみると、筆者の校長講話で、児童は、廣池千九郎の人生の指針である本来の「三方よし」を理解し、実践していこうとする姿が見え始めた。そこで、今後は、「自分よし」「相手よし」についても考えさせるのではなく、最初から「第三者よし」を考える「三方よし」についての校長講話を実践することが必要であると考え。

◇ 引用文献 参考文献

- (1) アリストテレス『ニコマコス倫理学（上）』、岩波書店、1971年
- (2) L・コールバーグ著、岩佐信道訳、『道徳性の発達と道徳教育』、麗澤大学出版会、1987年
- (3) 廣池千九郎『道徳科学の論文（全10冊）』、モラロジー研究所、1986年（初版1928年）
- (4) 中田中『思いでの旅 廣池博士に随行して』、廣池学園出版部、昭和35年
- (5) 岩佐信道「三方よしと相互依存のネットワーク」、『道徳と教育』、日本道徳教育学会、第336号、2018年3月、p.44
- (6) 行安 茂「デューイと道徳教育～アクティブ・ラーニングの可能性と課題～」、『日本デューイ学会紀要』、第58号、2017年、p.114